



# 地域づくりの 「これまで」と「これから」

## 生活支援コーディネーター座談会（名取市・東松島市・美里町）

積極的に住民と関わり、果敢に地域づくりに挑む名取市、東松島市、美里町の生活支援コーディネーターたちに、これまでの活動の手応えや今後の展望などを座談会形式で語ってもらった。

（司会進行＝高橋靖之、菱沼栞。2024年1月31日収録）



### 【座談会の参加者（写真左から並び順に記載、敬称略）】

高橋靖之（たかはし・やすゆき）[司会]＝宮城県社会福祉協議会「宮城県地域支え合い・生活支援推進連絡会議事務局」推進係長。48歳  
菊地紗徒子（きくち・さとこ）＝名取市社会福祉協議会業務係長兼介護支援専門員。地域包括支援センターや居宅介護支援事業所などを経て2022年度より第1層生活支援コーディネーター。モットーは「頼まれたことは笑顔で引き受ける」。名取市出身、岩沼市在住。43歳  
眞籠孝史（まごめ・たかふみ）＝東松島市社会福祉協議会地域福祉課地域福祉推進係のCSWで2017年度より第1、2層生活支援コーディネーター。社会福祉士、介護福祉士、介護支援専門員。モットーは「時の流れに身を任せつつ逆らう」。仙台市出身、旧矢本町育ち、東松島市在住。42歳  
高橋ゆかり（たかはし・ゆかり）＝高齢者グループホーム勤務を経て2017年6月、美里町社会福祉協議会へ入職し、生活支援コーディネーターに就任。社会福祉士、介護支援専門員。モットーは「初心忘るべからず」。涌谷町出身、在住。40歳  
横山太一（よこやま・たいち）[オブザーバー]＝宮城県長寿社会政策課地域包括ケア推進班技術主査。42歳  
菱沼栞（ひしぬま・しおり）[司会]＝宮城県社会福祉協議会「宮城県地域支え合い・生活支援推進連絡会議事務局」主事。33歳

## 地域づくりの手応えは

**司会** 手応えを感じた地域づくりの実践は。

**眞籠孝史** 東松島市には70ほどの自治会があって、そのうち約50で「地域支え合い会議」が発足しています。

**司会** 第3層（※東松島市では主に自治会圏域を指す）の協議体ですね。

**眞籠** そうです。ここ3、4年で発足数が伸びています。会議には自治会役員、民生・児童委員、サロンの世話役らと専門職が出席します。気になる人の情報を共有したり、地域のつながりを生かして困りごとを解決するような取り組みも進んでいます。自力でのゴミ出しが難しくなり、サービスに頼っていた人に対し、住民が「やるよ」となったり。

地域包括支援センターや生活困窮者自立支援事業所の職員が会議に参加することで、住民が関わりづらかった生活保護受給者ともゴミ出しの手助けなどを通じてつながるようになっていっています。

**高橋ゆかり** 美里町では、住民が主体となってゴミ出し代行を始めた地区があります。3年ほど前、社協で地域支え合いモデル事業をスタートさせ、行政区の一つで実施しました。区長や民生・児童委員、地域づくりに関心のある人たちが集まって理想的な地域像や

生活課題などについて話し合いを重ね、昨年12月、試行的に支え合い活動の仕組みを立ち上げました。まずは高齢者世帯のゴミ出しを1回1000円で引き受けようと。その地区は坂道が多く、不燃ごみの集積所は1か所だけ。事前のアンケート調査でゴミ出しに困っている高齢者が多いとわかったんです。

**司会** 3年かけて立ち上げましたね。

**高橋** あくまでも住民が主体的に地域の生活課題を知り、自発的に支え合いの枠組みづくりに取り組めるよう、話し合いはかなり丁寧に進めました。いろんな立場や意見があるなかで、何度も顔を合わせて粘り強く話し合い、実践にたどりついたのはすごいと思います。

**菊地紗佳子** 名取市では、コロナ下でも「地域支え合い報告会」、いわゆるお宝発表会をずっと継続しています。2016年度から毎年度開催していて、2018年度からは市長も毎回出席。継続することで住民の地域づくりへの意識も高まっていると感じます。

**司会** 特に印象深いお宝は。

**菊地** 飯野坂地区に「飯野坂21（トウエンティーワン）」という高齢女性のグループがあって、週1回サロンを開いています。サロン会場へ向かう道すがら仲間の家に寄って声をかけます。「きょうは行く?」「病院の日だから行かない」といったやり取りが繰り返り

げられます。若い頃から農協女性部などの活動でつながりをつくっていて、気軽に家を訪ね、声をかけられる。元々つながりのある人たちのサロンは、無理なく楽しく運営できます。

見守りも日常的に、自然に行われます。

## 新型コロナウイルスの5類移行

**司会** 昨年5月、新型コロナウイルスが5類感染症へ移行しました。住民活動に変化は。

**眞籠** 介護予防サロンはコロナ前と比較して参加者が3分の2ほどしか戻っていないところもあります。参加しなくなった人はどうしたのかと聞くと、サロンには来ないけど別の活動を楽しんでいると。それはそれでいいと思うし、そういうことを住民同士で把握しているのが大事。

地域のお祭りや交流イベントは、昨年5月以降一斉に再開した感じです。

**菊地** 名取市でも去年、多くの地区で夏祭りなどが復活しました。やぐらの組み方がわからないとか、発電機を久しぶりに使おうとしたら動かないとか、役員が入れ替わって運営の仕方がわからないとかで、ずいぶん苦労した



ようです。

一方で

「やって

よかった」と

という感想は

どの地区でも聞かれました。子どもみこしの再開で盛り上がった地区もあります。ある町内会の役員は「地域の行事は飲食をともにすることが重要。それが子どもから高齢者まで参加する人を増やし、つながりを育む。防災訓練も訓練や研修だけでなく、炊き出しをして一緒に食べるべきだ」と言っています。コロナ下で自粛していた会食を再開させたいと。

**高橋** 美里町ではコロナ下、役場の介護予防担当と連携し、閉じこもりに伴うフレイルを予防しようと「いきいき

百歳体操一の普及に取り組みました。66行政区で住民が百歳体操を行うサロンは当時ゼロでしたが、現在は40近くになっています。

お祭りなどの再開は地区によって差がありますね。3年ほど休止した影響で担い手を確保できない、手順がわからないなどの問題が生じ、休止・縮小したままのところも。

## 地域住民に どう向き合う

**司会** 住民の主體的かつ自発的な地域づくりを促すために、心掛けていることは。

**高橋** 主役はあくまでも住民ですから、テーマに応じて私たちは役に立ちそうな情報を提供し、話し合いの刺激というかヒントにもらうっていうのが基本的な姿勢です。あっちのまちではこういうことをしていますよ、こっちの地区社協ではこんなことに取り組んでいますよ、というふうに。

住民には、うまく私たちを活用してほしい。普段なら同席することがない人たちが顔を合わせ、地域づくりを話し合う場を設ける、いろんな人に加わってもらう、そのために私たち社協職員を上手に利用してもらえればいいと思います。

**司会** 眞籠さんは地域づくりの支援者であると同時に地元住民でもある、という立ち位置ですよ。

**眞籠** はい。地元の人間関係にとっぴりです。高齢者に限らずいろんな世代の人と付き合ってます。そこで感じるのは、地域づくりは子どもを軸に考えることが大事だということ。いま生まれている子どもたちが将来にわたって住み続けたいと思う、そんなまちにしたいですよっていう話はよくしています。それが地域づくりの動機になる。先ほど菊地さんが子どもみこしの話をしましたが、そういうところが大事。生活支援体制整備は介護保険の事業で、高齢者を対象とするわけですが、だからといってこの事業で取り組む地域づくりから子どもを外すべきではありません。

ある地区で、高齢者が主体的に世代間交流に取り組もうと、若い世代と話し合いをしました。そのとき子育て中のお母さんが「知らないおじいさん」と言った。逆に言えば、知っている人になら安心して預けられる。だから私は、住民が主体的に地域づくりをしていく前の段階として、顔の見える関係をつくるということに重点を置いています。顔の見える関係ができてくると、自分たちでこういうことをしたい、こんな地域にしていきたいといったことを話し合えるようになる。子どもを軸につながりをつくれれば、親の孤立も防げます。

## 協議体を どう運用するか

**司会** 冒頭で東松島市の第3層協議体の話が出ましたが、協議体の構成や運用は各市町それぞれですね。

**眞籠** 名取市の協議体

について詳しく聞きたい。独特ですよ。

**司会** 名取市の協議体は、構成員が固定されていないなどの特徴があります。菊地さん、説明をお願いします。

**菊地** 当初は行政が協議体を運営し、地縁組織の代表や介護・福祉事業所の職員らが構成員となって、地域の生活課題の確認などをしました。そのあと、話し合いの方向性をうまく見出せない状況になり、再構成。協議体運営は社協に委託されました。社協では、まず3か年計画で各地区ごとに自治会長や民生・児童委員、サロンの世話人などに集まってもらい、地域のお宝や生活課題などを住民自身が再確認する話し合いをしていただくもあり、いろんな分野の人たちを集めるのではなく、活動のカテゴリー別に参加者を集めることにしたんです。

**司会** それは第1層協議体ですか。



**菊地** はい。

名取市では協議体は第1層だけです。正式名称は名取市生活支援協議体で、愛称は「なとたん座談会」。名取を探索・探求する、を略してなとたん。

**司会** カテゴリーにはどのようなものがありますか。

**菊地** 3つあって、お茶会、体操サロンの2つはほぼ固定。もう一つは年度によって子ども食堂だったり、ゴミ出しなどの生活支援だったり。毎年度テーマを決めて、カテゴリー別にテーマに沿って話し合います。昨年度は「活動を長続きさせる」をテーマに、

お茶会、体操サロン、子ども食堂のカテゴリー別に話し合いました。それぞれの主宰者や世話人が集まって長続きの秘けつを考えるわけです。グループワークをすることもあります。人数は少ないときで10人前後、多いときで20人ぐらい。カテゴリーごとに1回ずつ、年度内に計3回開催。参加する顔ぶれは毎回違います。

**眞籠** 構成員に委嘱状は。

**菊地** 出していません。市が運営していた頃は出していましたが、現在は社協の会長名で案内状を出す形です。

**司会** 枠にとられず意見や情報を交換できますね。

**菊地** おしゃべり会のような協議体です。サロンの活動がマンネリになってきたという話があれば、うちではこんなことをしているから今度見に来て、といったような交流も生まれています。

**司会** 話し合いのテーマはどう決めるのですか。

**菊地** 私を含め社協の担当職員4人が話し合っただけです。

## 行政、専門職との連携は

**司会** 美里町は、コーディネーターと行政がかなり話し合いを積み重ねています。

**高橋** この事業が地域包括ケアのどの部分に位置付けられ、具体的に何を

していくのかとか、協議体での話し合いのテーマとか、町の事業担当と一緒に考えています。町の職員と一緒に悩み考えてくれると本当に心強い。

**司会** 東松島市も行政との連携はいい感じですね。

**眞籠** 行政の事業担当は地域福祉に熱意を持っていて、「東松島はどうすればもっといいまちになるか」「どうすればずっと住んでいたいと思えるか」といった視点で生活支援体制整備を使いこなそうとしています。意見、情報の交換は随時。行政側の理解があれば私たちも動きやすい。逆に、行政側の熱意や理解が得られないとか、目指す方向が違ったりすると難しくなる。極端な話、この事業は介護保険に基づくものだから若いお母さんたちが子ども食堂をやるようになったとき、コーディネーターが関われないとなると、地域づくりの幅が狭まってしま

う。行政の立場もわかるんですが、国や制度のほうを向くのか、地域や住民のほうを向くのか、結局はその姿勢が問われているのだと思います。

**司会** 眞籠さんは在宅医療・介護連携などの会議にも出ていますね。

**眞籠** 地域包括ケア推進会議というのが上位にあって、その下に横並びで在宅医療・介護連携、認知症ケア、生活支援体制整備の会議体や協議体があります。行政の事業担当から参加の指示があり、私はこれらすべてに関

わっています。在宅医療・介護連携では、個別ケースについて医療、介護、福祉、法律などの各分野の関係機関がICT（情報通信技術）ツールで情報共有を始めました。地域資源の情報もこのシステムにアップします。認知症ケア推進会議では、たとえばサロンに認知機能の低下した人も来ているなら、そのサロン自体をチームオレンジにするといった調整をしたり。

## 展望、抱負、決意など

**司会** どんな地域づくりを目指し、どう活動していくか、思いや抱負を。

**菊地** 住民の皆さんはそれぞれ暮らしや地域をよくしようと工夫を凝らしています。自治会の役員や民生・児童委員でなくても近所の人をさりげなく見守ったり、仲間を集めてごみ拾いをしたり、ウォーキングしながら防犯パトロールをしたり。とても地域福祉に寄与しているんですが、当事者にはあまりにも日常的過ぎ

て、その価値に気づかなかつたり、効果を実感しにくかつたりします。私たちが客観的にその価値や重要性を評価し、伝えるべきです。そういう関わり

を今後も続け、住民が地域づくりに意欲を持ってもらえるようにしたい。「地域支え合い報告会」もその手段の一つとして続けていきたいと思いません。

**高橋** 住民が困りごとを抱える前の段階として、小さな諦めの積み重ねがあると思うんです。視力が低下したから、好きな縫いものを諦めるとか、毎年お餅を周囲におすそ分けしていたけど、餅つき器が壊れたから諦めるとか。もし近所の誰かが針に糸を通してくれたり、餅つき器を修理に出してくれたりすれば諦めを防げます。小さなニーズに

気づいて手助けする人に





つながる、そういうことが地域で自然に行われれば、それが本当の支え合いだと思います。マッチングの仕組みもコーディネーターもいららない。コーディネーター不要の地域が理想。そのために、サロンなどで話を聞くだけでなく、個々の暮らしのなかで声を拾い、日々の生活を丁寧にアセスメントしたいです。

**真籠** そういふアセスメントは大事だと思います。本人の暮らしぶりや人間関係を知らずに、安易にサロンなどの地域資源や介護サービスにつなげようとするところがある。その人がグラウンド・ゴルフに通っているとか、実は別の地区にたくさん友人がいるたりするなら、そっちをたいせつにすべき。そのためには専門職と地域住民が双方向に意見や情報を交わせることが重要で、東松島市では第3層協議体をそういう場にしていきます。

**司会** 真籠さんの抱負は。

**真籠** 繰り返しになりますが、高齢者だけでなく、このまちに住んでよかった、これから住み続けたいと思えるようなまちにしていけるよう、まずは人のつながりを豊かにしていくことが必要。30代ぐらいの人と話していると、集団より個を重視する傾向が非常に強くなっていると感じます。何かあったとき簡単に孤立に陥る恐れがある。その予防線を地域に張っておきたい。つながりづくりの支援はずっと続けていくつもりです。

**司会** 貴重なお話をありがとうございました。

## 「座談会を終えて」

**司会・高橋靖之** 2015年に生活支援体制整備事業が始まり、各市町村に生活支援コーディネーターが配置されて、やはりよかったと思います。今回の座談会で『続ける』という言葉が何度も出てきました。地域づくりは5年、10年単位で考え、実践していくものだと改めて実感しました。

**司会・菱沼菜** 孤立の問題は地域住民だけでなく、コーディネーターにもあります。所属組織のなかで、あるいは行政との関係のなかで、孤立に悩む人は少なくない。座談会の3人は周囲と上手に連携できるからこそ、いい仕事ができるという面もあると思います。コーディネーターを孤立させないことが、私たち事務局の大事な役割と再確認しました。

**オブザーバー・横山太一** コーディネーターの皆さんが何年も継続して取り組んだから、いまこうなっている、というものがたくさんあるはずで、行政の立場からは単年度で活動内容を見ることも必要ですが、長期的視点で地域に関わるコーディネーターの活動やその成果について、定性的にきちんと評価することが求められているように思います。



問い合わせや情報提供はお気軽に事務局まで  
電話022-266-2621 担当:高橋靖之、菱沼菜